

図画工作科 表現の違いから新たな関心を照らし、 意味づくりを楽しむ子の育成

立川 泰史

「経験があるところには必ず関係がある」といわれる。造形的な創造経験においても「関係」は棚上げできない。わくわくする経験を生み出す「関係」は、ゆるやかに迷いながら「解き結ばれる」もの、と考えてみたい。

こうした自他関係の「結び目」は、他の経験を知ることを通して、自らを批判的に乗り越えていく営みから生まれるのではないだろうか。実際、子どもたちは、着かず離れずしながら「自他の違いやよさ」を照らし出し、より自分らしい感じ方の振り幅を広げている。表現する場面には、「からだ」や「場」がつくり出す文脈が、とても大きくかかわっているように思えてならない。



1. 図画工作科の研究テーマ

(1) 問題の所在

①消費社会の文化

「詳しくはWebで」という誘いを武器に、メーカーは製品を細分化し続ける。一方消費者は、他人と違うものをいち早く手に入れることで自分を個性化することに関心が高い。このように、他との違いを際立たせていくだけの個性化は「差異の体系」と呼ばれ、社会や文化の格差を助長するものとして懸念されてきた。だが、多くの賢い消費者なら気付いているように、日常の消費は「文化」を形づくる。消費者は「使い手」としての態度を示すことで、「作り手」の意図や構造を間接につくり出している。このように考えれば、問われている消費態度とは、他を消去して私らしさを演出することではなく、社会的な関係をまなざしながら「文化の形成者としての個性を発揮する態度」であると言えないだろうか。では、豊かな関係を保ちながら個性を発揮する感性とは、どのように育むことが可能だろうか。

②関心の解き結び

「関係をつくる」とは、各自が期待された役割を演じるのではなく、他の経験を学ぶなかで自らの経験を批判的に乗り越えていく営みに参加することに近い。関係のつくり手たちはまた、その関係につくり直されるという複雑な様相をはらんでいる。また、自分を批判的に乗り越える厳しさ同様に、「他の経験を学ぶことの方が、より難しい」という厳しさがあることも容易に想像できる。が、逆にいえばこのような「関係の複雑さ・厳しさ」が、自他を個性的な主体として認める土壌になるのではないだろうか。

なぜなら、子どもは無理せず厳しい関係を解き、分らない「差異」をいったん棚上げ（疎遠化・周縁化）する才に恵まれている。また、いったん棚上げした関心ごとでも、いつか自分にはない可能性を示してくれるものとしてそっと温めていることが少なくない。とすれば、「関係をつくる」という問題は、「となり合う関係・向き合う関係」に潜んでいる「解き結び容易な関係力」をどのように発揮して関心を広げるか、ということが課題になる。

(2) テーマ設定の理由

① 違いを照らす

図画工作科では、子どもたちに内在する関係づくりの資質と個性化する過程に重視して、これらを十全に発揮する題材活動を検討することにした。

これまで検討したように、子どもは「違い」を強調したり消去したりすることで個性化していくのではない。照らし出した「違い」を自分の中に保留したり語り直したりする関係を通して個性化していく。ここでは、子どもたちが「違い」に何を感じ、どのように固有の「すじみち」を編み直していくのか、その様子を探りたいと考えた。

② 違いをつなぐ

例えば、仲の良いふたりが似たような模倣から表現し始めることがある。ところが、「同じ表し方がとうてい無理なわたし」が自分の中で少しずつ大きくなり、個別的なイメージに分かれていく。逆に、離れた場所からずっと手技に視線を投げかけているという姿、時にはスッと体を寄せに出かけては戻り、何事もなかったように自分の活動を続ける姿がある。体の距離を縮めて「となり合う関係」をつくるほどに関心を引くのは、「自分にないものをみる体験」への深い興味である。それは「違い」そのものが作り出す新たな「関係の広まり」と言える。4年生で簡単に行った意識調査では、「真似をする・しない」にかかわらず、自他の「違い」(差異)は「同じところ」(同一性)よりも関心を寄せる観点になりやすいことが分かった。他の表現への関心の高さが体をも突き動かすのが模倣だが、そもそも関心を寄せる契機に他者との「違い」は大きくかかわる、といえそうである。すると、「違い」をもって「関係」の海に漕ぎ出る資質、「からだ」で発揮する技能とも呼べる「関係」への志向力を培うことが課題となる。

(3) 育てたい子ども像

いうまでもなく図画工作科の学習がねらうのは、造形スキルではなく、意味づくりのタクティクスである。「何々ができる」というアビリティーより、意味ある「関係」を編むコンピテンシーが求められる中、「差異」と「個性化するプロセス」への注目から子どもの姿を描き出す大切さが際だってくる。そこで、次のように期待する児童像を設定した。

- 自他の感じ方・表し方に違いやよさを感じ、関心を寄せる子
- 自他の違いやよさから新たな関心を照らし、広げる子
- 自分の感覚や技能を基にイメージをもち、意味づくりを楽しむ子
- 経験したエピソードの関連や意味を解き結びながら伝え合う子

2. 全体研究テーマとの関連

(1) 図画工作科における「求め合い、つなげ合い、学び合う子」

① 個性化の過程

どのような題材・活動だろうと、「子どもはそれまで培った個性を素朴に発揮する」という子ども観が常識化している。しかし、子どもはその都度「いま・ここ」の文脈で個性化する経験の途上にある。こう考えると、図画工作科における「学び合い」は、まず子どもの「個性化するプロセス」に位置付かなければならない。いわば、「私になっていく図工」を丁寧に描き出すことが求められる。

② 主体性の原基

ここまで、子どもが本来もつ「解き結び容易な関係力」と「違い」を周縁化する才力について検討してきた。いいかえれば、これらは個性化していく子ども自身を支える「主体性」の原基である。

③ 求めあい

まぎれもなく「違い」(差異)は、自他の感じ方や表し方の「ズレ」ということができる。子どもは、この「ズレ」を慌てて打ち消そうとせず、互いの異なりについて同時にそれぞれの意味を認める特徴がある。これは、子どもの自然な応答力・受容力であり、漠然とした求め合いを含んでいる。こうした漠然とした求め合いを土壌とし、子どもは思考・判断・表現に先立って多

④つなげ合い

様な選択肢を受け入れる。いわば判断の厚みを増す作業とも言える。が、興味深い「違い」への関心は、後に批判的に自分を乗り越える厳しさを控えている。「判断の厚み」は多少の厳しさに耐える皮下脂肪のように、固有の「すじみち」を編む営みを支え、多様な結び目を可能にする。

このように、子どもが個々に意味をつくるネットワークに注目すると、多様にある関心の結び目をどのように選びとっていくのかが観点になる。ここでは、子どもたちが互いの〈間〉にある意味をまなざし、自他の豊かな判断や表現にある違いやよさから新たな関心を照らす姿を「つなげ合い」の場面であると想定している。

⑤学び合い

これまでの検討から、「学び合い」は、互いの違いを貴重な明かりとして解釈しながら固有の「すじみち」を歩む場面として描くことができる。

(2) 図画工作科における「吟味のある授業」

通常吟味は、明確な動機や目的、あるいは選択の条件を想定した範囲で行われる。ところが、これまで検討した「違い」を重視する学び合いの文脈は、「判断の厚み」を増すことであり、「違い」を「違い」のまま残し、個々の意味を抱えながら進むことである。少なくとも、相互の言葉や表現にある隔たりを埋め合わせる吟味は想定できない。

ここで考えられる吟味は、むしろ多元的な価値をかかえて表現の落ち着き先を探る固有なすじみちに入ることであり、「選択肢の実技的な解きほぐし」、あるいは平易にいう「試行錯誤」である。かつて関心を寄せた自他の「違い」に認めた意味を、違った文脈にあてはめて直すことになる。

したがって、図画工作科での吟味する姿とは、「関心の広がりから、新しい表現の見通しを際立たせていく姿」と言える。様々な状況から幾度も試す工夫は、復相的な見方・感じ方の実践と裏表の関係にあり、「つくりだす喜び」を確かに支えるものである。

3. 研究の重点

(1) 研究の重点

子どもが自他の感じ方や表し方の違いやよさを実感し、関心を寄せる機会を捉えるには、「向かい合う関係」「となり合う関係」を有効に活用することが要件になると考えた。多重の意味を抱えた関心が共鳴し、多声的・応答的な学びとして位置付く方法を具体化していきたい。

特に、子どもが「関心を寄せ合う機会を捉えること」が大切である。第一に、「興味深い感じ方の隔たりに気付きやすい活動」の構成が求められる(授業構想)。第二に、「関係の解き結び」を助けるには、「自他関係・意味関係・もの関係」などを通して「違い」を問う体系をつくることが望まれる(学習者理解)。第三に、「向かい合う関係」など身体の配置を中心に、材料の可逆性、シンプルな用具の精選が必須の観点になると思われる(教材研究)。ただ、表現は自ら決めて他に伝えてこそ成り立つ。プライベートなエピソードが、「形や色にまつわる言葉になる」ことが前提である。

(2) 研究の内容

①「違い」を照らす
マーキングツール

子どもの関心が交差し、それぞれの意味が独自のネットワークを結ぶ場面は、いわば「関心の地図」が広がる場面である。「違い」が「よさや美しさ」として照らし出されるのは、形や色を基に自分の感覚に訴えかけてくるからである。しかし、個人的な感覚や感性が「関心の地図」を這い回るだけでは自他に伝えるものにならない。「みんなの目」という土台にあがるには、「違いやよさ」を比較・吟味するための「マーキングツール」を必要とする。ここで言う「マーキングツール」とは、いわば「違い」を照らし出した「観点」、自他の関心の枠組みを示す「ことば」などを指す。

- ②マーキングツールの働き 「マーキングツール」は、漠然とした体験からある一面の相貌を感じるように働く。ほとんどの場合、子どもは無意識に違いやよさを感じているので、この「マーキングツール」は感覚に潜在している。しかし、プライベートなエピソードを伝え合い、関心の的を類型化するなどして、このツールが浮き彫りになってくるはずである。一度顕在化したマーキングツールは、他の文脈にも転移可能な観点として子どもに活用されることが期待できる。
- ③マーキングツールを掘り起こす対話 しかし、こうした「マーキングツール」は、教師の技量だけで案出できるものではない。少なくとも「つくる・みる」活動は体全体で味わう動きを含んでいることから、子どもの身体的な経験に根ざした話題を発端とする必要がある。また、表現活動の内容や方法によってハイライト化の文脈も多様になると考えれば、教師も子どもと共に「マーキングツール」の掘り出しに参加することになるだろう。これは、「何に案内され、そこに注目したのか」といったトピックを具体的なエピソードに基づいて解き結ぶ作業になるはずである。
- (3) 研究の方法
- ①授業デザインの主な視点 互いの関心の「違い」を照らし出す授業をデザインするにあたり、次のような3点を視点とした。
- 身体性（材料との新鮮な出会い、からだで心底楽しめること）
 - 迫真性（自分の体験を基に感覚や感性を働かせる意味を吟味できること）
 - 偶有性（多様な可能性から、即興的・身体的な技能を発揮できること）
- ②実践考察の手だて 第4学年と第6学年で同じ題材を実践し、ビデオ画像や会話、振り返りカード、全体での談話活動の記録を収集した。その上で、自他の「違い」をどのように認めながら表現や鑑賞に生かしていくのかという観点から子どもたちの「関心の地図」の拡大、「マーキングツールの働き」を考察した。

4. 成果と課題

(1) 研究の成果

- ①意味づくりの多声的な性格 造形活動における「違い」の意識や働きに注目し、子どもによる意味づくりの内実を検討した。次のような意味づくり過程の特性が明らかになった。
- 造形活動においては、素材に触れる身体経験に裏付けられた対話が変わることによって「違い」を意識した意味づくりが容易になる。
 - 一旦棚上げされた選択肢も他の異なる関心から再活用される場合がある。「他もあり得る」という偶有的な地平を開くように、「意味」と「表現」は切り離せない関係にある。
 - 今ある表現の文脈から「はなれる」、選択や結果を「ひきのばす」、隔たっているものの差異を「むすぶ」、参照できるもの楽しさを支える。
 - 意味づくりは、全く無作為な選択に向かうのではなく、「造形するからだ」に働き返すものを選び取る傾向がある。また、異なるものを結ぶ先に、新しい意味を展望するように働く。

(2) 研究の課題

本来子どもたちは隣り合う関係・向き合う関係など、身体的な隣人関係から相互行為を繰り返しているのが造形活動の特徴である。このごく自然な子どもの応答性にとどまることなく、新たな関心の広がりを支えるには、「違った体験」のトピックを関連づける談話活動の視点をより具体的に示すことが課題となる。「マーキングツール」は、確かに子どもの感覚や感性を発端にする視点だが、それらを育てたい資質や能力の観点の中に位置付けていくことが教師の役割であり、定式のない課題となる。